

## 物部川清流保全推進協議会部会 「山の保水力の回復を図るWG」要旨(第1回)

- 日 時： 平成24年2月8日(水曜日) 10:00~12:00
- 場 所： 香美市役所3階会議室 (香美市土佐山田町宝町1-2-1)

### ●内 容：

1. 独立行政法人森林総合研究所四国支所 森林生態系変動研究グループ長 酒井 寿夫氏より、今後の取組を進めるうえでどういう事柄にターゲットを絞るかを考えるための基礎資料として話題提供を受ける。

- ・ 保水量は土壌の厚さで決まり、土壌を守ることが森林の保水機能を維持することにつながる。
- ・ 土壌の厚さを短期間に増やす方法はないため、保水力を“増進”させることは不可能である。
- ・ 土砂流亡は自然状態でも普通に起きているが、必要以上に土砂流亡が起きることは100年単位の損失とも言える。
- ・ 土砂流亡を必要以上に起こさないことが重要であり、そのためには①植生による被覆、②人工林においては適切な間伐により林床植生を繁茂させることが有効である。

2. WG参加団体が流域で行っている山の保水機能維持につながる取り組みについて、情報共有を行う。

- ・ (県環境共生課) 環境先進企業との協働の森づくり事業による森林整備や間伐の促進、希少野生植物への食害防止対策としてのネット張りや調査等を行っている。
- ・ (県電気工水課) 杉田ダム上流域の森林の水源涵養機能を向上させること等を目的として間伐への助成を行っているほか、企業局の森整備事業として源流域において約109haの森林を整備する事業を行っている。
- ・ (香美市) シカの捕獲実績は年間1500頭ほどになっている。また国の政策で個人の小規模な切り捨て間伐への補助がないなかにあって県公営企業局の助成制度はありがたい。
- ・ (県鳥獣対策課) 特に管理捕獲の面で香美市と連携して事業を展開している。今後は捕獲隊への助成を厚くする方向性である。効率的な狩猟を行っていくために、登山者や森林での施業者が連携してシカの日撃情報を集約する仕組みができればと考える。
- ・ (四国森林管理局) 公用車の運転日誌に日撃情報を記録していたことがある。そういう情報の集約化などが可能かもしれない。
- ・ (21世紀の森と水の会) 高知中部森林管理署との協定森林において、新たな広葉樹の森づくり活動を企画した。流域の川や森の現状を知ってもらう機会となるよう、参加者を募集しているところである。
- ・ (三嶺の森をまもるみんなの会) 源流域の自然はシカの食害でどうしようもないところまできてしまっているが、地元であってもその現状を知らない人もいる。ネット張り活動などボランティアで出来ることをしていくとともに、パネル展やシンポジウムなどによる普及啓発活動を行っている。今年4月開催のアースデイ東京へのパネル展示も予定している。

3. WGの今後の取組みの方向性について意見交換を行った。

- ・ 取組みの輪を広げていくためのネットワークづくりが求められるように思う。現状は連携の仕方が少し弱いのではないか。
- ・ 興味のある人々にとっては大きな問題でも、日常生活と山との関わりが薄かったりする人々にとっては素通りしてしまうような事柄であり、この「素通りしてしまう層」への啓発のあり方がポイントになる。
- ・ 話題提供者の酒井氏からの科学的な話は、聞いていて面白かった。こういう話をもっと聞いてもらってはどうか。
- ・ 興味を持たない人に意識づけをすることの難しさはいつも感じている。行政にはこういった

事柄を住民に伝えていく役割があると思う。

- 三嶺をまもるみんなの会などのボランティア活動への住民参加は増えているか。
- ボランティア活動を体験してもらうことによって山で働く人々の後方支援も期待したいし、行政が公費をつぎ込む意義を理解してもらうための啓発活動だと考えている。流域で起きていることの実態について、流域の住民が共通認識を持ちたい。
- シカ被害に関するシンポジウムの参加者も年々減少傾向にあるが、啓発の重要性とともに記録も重要であるため継続している。
- 市民に知ってもらうことは重要であり、森林総合研究所が科学的な立場から出前講座を行うことは可能である。一方で、自然に対する想いを持つ層を底上げしていくことも必要で、例えば中高生への講義などを通じて大人になってからのサポーターを育てることも必要だ。
- このWGには、山の問題に起因して水量が少なくなることで直接影響を受ける人たちの団体（例えば土地改良区やJA）などにも加わってもらう必要があるのではないか。

### **会長まとめ**

- 間伐や植林の効果が出るまでには何十年もの月日がかかり、保水力をテーマとする山の問題は難しく理解しづらい面がある。このWGでは、活動や取組みが効果に結びつくものであることを市民に分かりやすく伝えることのできる素材づくりをしてはどうか。

以上